学べる道具 VOL.27

岡崎むかし館

炭火(すみび)アイロン

炭火アイロン／岡崎むかし館蔵

明治時代の文明開化(ぶんめいかいか)の動きにともない急速に欧米(おうべい)の文化が日本に流入します。そのため衣食住にも欧米の様式が取り入れられ、洋服とともに「炭火アイロン」もイギリスから伝わり、後に国産化されて広く普及しました。アイロンは英語で iron：鉄を意味する名のとおり、本体は鉄製で重みがあります。ふたを開き中に炭火を入れて、アイロンを熱して使用します。持ち手は熱くならないように、木でできています。先のとがった船底形(ふなぞこがた)の形態は、現在の電気アイロンにも共通する特徴で、衣類の細かなところまでアイロンがけができるように工夫されています。電気アイロンと大きく異なるのは熱源が炭火である点です。そのため火が消えないように、側面下部に空気を取り入れる空気口の穴が複数開いており、持ち手の前方部には煙突がついています。また、本体後部には火加減を調整できるように、開閉できる空気口もついています。アイロン本体の重さと熱で衣類のしわを伸ばすこの道具は、電気アイロンが一般家庭に普及する昭和 20 年代頃まで使用されていました。現在の電気アイロンも自動温度調節、スチーム、底金(そこがね)にフッ素樹脂(じゅしとそう)塗装、コードレスなど時代により変化がみられ、道具の歴史を通してその時代における知恵と工夫・技術進化が感じとれます。

＜参考文献＞　『世界大百科事典』平凡社、2005　　『昔の道具』ポプラ社、2013
『絵引民具の事典』岩井宏美ほか　河出書房新社、2008